



2011 年度

国際中医師資格認定試験

中医 執業医師 考試 第 140 期

去る 10 月 29・30 日、本草薬膳学院 9F 教室にて「国際中医師」資格認定試験が行われました。

主催の世界中医薬学会連合会(北京)からは賀興東先生、蘇敏先生の 2 名が試験官として来日され、12 名の受験生の皆さんは終始緊張され、2 日間の試験に望んでおりました。



「私の梅核気」 ……国際中医師試験を終えて……

国際中医師コース 川端 咲子

あれは試験を秋に控えた、太陽がまぶしい夏のある日のことであった。

普段何でもすいすいと通し、体重増加を懸念し乍ら頬張る食べ物が、咽にひっかかるのである。一口目はあれっ？二口目はするりと嚥下されるべき物の妙な存在感を意識し、三口目は口に運ぶ食べ物の量を減らして様子を見た。しかし少量のものでさえ飲み込んだ後も何か咽に残る…というよりも咽に何者かがいる…何事か！私はおのいた。いつの間にか食事量が減っていく。私にとっては前代未聞の重大事件であった。

未病を目指して薬膳を勉強しはじめ、その膨らみを期待して始めた中医学の勉強であった。

咽にいる憎い奴の存在に怯えるのではなく、自分自身の弁証論治を試みるに絶好の機会ではないか？私は痩せ細ってしまう前に立ち上がることにした。

＜問診＞

性別：女 年齢：どこから見てもおばさん
主訴：喉頭部に何か詰まったすっきりしない状態
現病歴：試験を控え、勉強不足にいつもいらしている。最近咽がすっきりせず、飲み込もうとしても飲み込めない いつもため息をついている 胸中窒悶、食欲不振、大便秘結 胃カメラにおいても異常はみられない

既往症：特になし

＜望診＞ 苔白膩

＜切診＞ 脈診には自信無く省略

とここまで弁証してふと思い出した。これは以前、授業で勉強したあのヒステリー球、またの名を梅核気というものではなからうか？

「梅核気」…咽頭部の異物感、梅の実が詰まっている感じが実体は無い 七情の不暢により肝気が鬱結し、気鬱から痰が生じ、痰と気が咽喉で交わり阻滞することによって発症する

まさしくこの症状が私のなかで起こっている。これ程判り易い状態は他に無い。

そこで次の段階である。

- ＜診断＞ 病名：鬱証
証候名：気滞痰鬱
- ＜治法＞ 化痰理気解鬱
- ＜処方＞ 半夏厚朴湯加減
(半夏、厚朴、茯苓、生姜、紫蘇葉)
- ＜指示＞ リラックスして気持ちを落ち着ける
ストレスとなるものを避ける



つまりは国際中医師試験の勉強が遅々として進まない状況によってストレスが重なり咽の閉塞感が現れた…＜弁証論治終了＞

本来私自身が誰に頼まれた訳でもなく始めた勉強である。それを気に病むのは少々恥ずかしいことなのではないか？人間の身体とは本当に不思議な(身勝手な)ものだと改めて感心した次第である。

そして、梅核気を不本意にも育てながら、ただ難解であった様々な病機や病証の概念が解り始めると、中薬は友となり、方剤は興味深いパズルに思え、自然と身体におこる総てのことが必ずどこかでつながることに感動し、ふと気がつく試験日を迎えていたような状態であった。

惜しまれず、試験終了と共にさりと消え去った期間限定梅核気であったが、今となっては本格的弁証論治の第一歩を教えてくれた、記念写真には映らない思い出深いものだったように思う。

そしてしっかりと残ったのは…魅力的な興味の尽きない中医学の世界へ引き込まれている私である。

最後になりましたが、この大変だけれども楽しかった勉強の日々を共に過ごした仲間へ感謝致します。授業の合間に頂く皆様御持参のお菓子やおしゃべりの温かさに支えられた日々でした。

そして不肖の生徒の私を見放さずに支え続けて下さった劉先生、陶先生本当にありがとうございました。

勉強に終わりはありません…いつまでもどうぞ宜しくお願い致します！